

皆様ご承知のとおり、“子どものころ”が、最近国内外において世論の大きな関心を得ております。深刻な少子化・人口減少問題や、最近の疫学研究で自閉症関連疾患の生涯有病率が実に人口の 1-2%程度にまで急激に増加していることなどの理由から、子どものころの問題は、今や 21 世紀の我が国および国際社会における重要課題の一つと言っても過言ではありません。最近この流れを受けて、国連が 4 月 2 日を世界自閉症啓発日として制定し、厚労省が 11 月をわが国の児童虐待防止推進月間に指定した、と伺っております。

金沢大学は全国の大学に先駆けてこの問題に真剣に取り組んでおります。つまりこれまでの実績として平成 16 年度から、神経科学が専門の東田陽博教授が中心となつての JSPS・21 世紀 COE プログラムと子どものころの発達研究センター、教育学が専門の大井学教授が中心となつての大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学・小児発達学研究所連合大学院と JST・RISTEX 研究プロジェクト、哲学が専門の柴田正良教授が中心となつての JSPS・若手研究者大航海プログラム、そして精神医学が専門の三邊が中心となつての JST・ほくりく健康創造クラスタープロジェクト、などの大型プロジェクトでございます。

平成 24 年度から新たに、金沢大学子どものころの発達研究センターの一般財源化が内定しました。また AMED による国家基幹研究開発推進制度・脳科学研究戦略推進プログラムの委託を受け、先にお名前が挙げた東田教授や児童精神医学が専門の棟居俊夫教授らが中心となり、金沢大学が我が国における 4 か所の発達障害研究拠点のひとつとして先端的研究を担うことになりました。特に金沢大学には、オキシトシンの臨床応用研究を中心とした神経内分泌学的研究が期待されております。また平成 25 年度に三邊と菊知充教授が中心となつて、JST・革新的イノベーション創出プログラム (COI ストリーム) に金沢大学で拠点代表として唯一選定され、これまで以上のスケールの国家委託型大型プロジェクトに参加しています。さらに平成 27 年度には連合大学院小児発達研究科が核となる、文科省委託事業“子どもみんなプロジェクト”で、教育現場への脳科学成果の還元を同志の 8 大学と目指すことになりました。石川県では、小松地区の教育現場に、受け入れフィールドして御協力頂くことになりました。平成 28 年度からは、これまで横河電機が担ってきた MEG ビジネスの金沢拠点を、リコー社が受け継ぎさらに拡大発展することとなりました。引き続き「子どもにやさしい」をキーワードに、リコー社が MEG システム/PFU 社が MRI システムの社会実装を、我々と COI ストリームで取り組むことになりました。COI ストリームではこの他にも多彩な産学共同研究が展開されており、装着型機器や IT 関連機器や治療用オキシトシン製品の社会実装研究に、我々も積極的に参画しています。平成 30 年度からは、菊知充教授が、CREST 研究「脳領域・個体・集団間インタラクション創発原理の解明・適用」に参画し、数学、ロボット工学、社会学、霊長学の専門家と、多彩な研究チームを組むことになりました。

このような切れ目ない国家的大型研究教育委託事業の支援や、科研費などの個人研究費採択蓄積の結果、お蔭様で当センターは我が国のこの分野の研究拠点に成長しました。これまでの金沢大学の取り組みの最大の特徴は、倫理・教育・福祉などの人文科学の分野から、生物学・医学・工学などの自然科学までの幅広い文理融合の協力体制を基礎として研究を深め、高度専門職の人材育成、産学協同事業、市民参加の啓蒙活動を展開してきたことでもあります。さらに連合大学院制度などを通して、志を同じくする他の 4 大学との教育・研究の連携強化を進めております。このような金沢大学の学内外においての“子どものころ”をキーワードとして連携協力体制は、その内容以上に、今後の国立大学の在り方を先取する機構改革の新しい試みとして注目されていると自負する次第でございます。

平成 30 年 1 月 1 日

子どものころの発達研究センター長 三邊 義雄